

## 高校福祉科進学動機と介護・援助に関する意識調査

サトウ ダイスケ  
佐藤 大輔\*

**目的** 介護福祉士養成を行う高校福祉科の生徒と、対照群として総合高校の生徒の高校入学以前における介護経験や環境を比較し、介護や援助に対する意識の違いを検討し、高校福祉科の生徒が、高校から介護の道を志した関連要因を明らかにする。

**方法** 高校福祉科（福祉科群, n = 136）と総合高校（対照群, n = 260）において、2008年12月～2009年2月に質問紙調査を行った（有効回答割合：福祉科群, 97.1%；対照群, 95.0%）。質問紙の項目は、基本属性として、学年、性別、同居している家族構成のほか、高校入学以前の介護福祉施設訪問経験と介護実施経験、家族や親族内の医療・介護従事者の有無を尋ねた。さらに、介護のやりがいについては4件法で、既存の援助規範意識尺度は5件法で回答を求めた。福祉科群と対照群の比較は、基本属性を $\chi^2$ 検定、介護のやりがいの得点と援助規範意識尺度得点の比較をt検定とU検定を用いて行い、有意水準を5%とした。

**結果** 福祉科群では、対照群と比較して、祖父（20.5%）、または祖母（34.1%）と同居している者が有意に多く、高校入学以前の介護福祉施設訪問経験がある者（70.5%）が有意に多かった。また、福祉科群では家族や親族に医療・介護従事者のいる者（50.8%）が有意に多かった。介護のやりがいを尋ねた質問の平均得点では、福祉科群（ $3.62 \pm 0.60$ , n = 130）が、対照群（ $3.26 \pm 0.76$ , n = 232）よりも有意に高かった。また、属性別に群間比較を行った結果、男女では違いがみられた。援助規範意識の両群間の平均得点の比較では、自己犠牲規範意識において、福祉科群（ $3.53 \pm 0.49$ , n = 122）が、対照群（ $3.31 \pm 0.48$ , n = 240）よりも有意に高く、弱者救済規範意識でも、福祉科群（ $3.58 \pm 0.42$ , n = 127）が、対照群（ $3.45 \pm 0.47$ , n = 239）よりも有意に高かった。

**結論** 高校福祉科生徒の特徴から、環境を整えれば若者の介護に対する意識が高まる可能性がある。また、高校福祉科の女子においては、高校入学以前の経験や環境にかかわらず、自己犠牲規範意識が高い傾向があり、介護福祉関連職への適性の高さがうかがえた。

**キーワード** 高校福祉科、介護のやりがい、援助規範意識

### I はじめに

1988年4月に「社会福祉士及び介護福祉士法」が全面施行され、介護の専門資格である介護福祉士が誕生した。それから20年以上が経過し、介護サービスが増大する中で、介護福祉士

は、サービスの担い手の中心となっており、2008年2月末で、約64万人の介護福祉士が登録されている<sup>1)</sup>。しかしながら、介護福祉士を取り巻く問題には様々なものがある。その中でも、介護福祉士養成校における充足率の低下には早急な対応が必要である。厚生労働省の調査によると、介護福祉士を養成する私立短期大学では、2007年の定員充足率は69%であり、2004年から

\* 学校法人彩煌学園湘南医療福祉専門学校専任教員

約26%低下している<sup>2)</sup>。さらに、2009年の介護福祉士養成施設における定員充足率は55%となっており、同様に低い割合となっている<sup>3)</sup>。これらの要因として、介護職の賃金が低いこと、身体的にも精神的にも負担が大きいことなど、介護職全体の悪いイメージが根底にあると想像できる。

このように、高校卒業後の若者が、介護福祉士を敬遠する傾向にある中で、高校から介護福祉士を目指す者も存在する。高校福祉科は、高校3年間で介護福祉士国家試験の受験資格が得られ、介護福祉士国家試験に合格すれば、介護福祉士の資格を取得することができる。本研究では、若者が介護福祉士を敬遠する中で、なぜ高校福祉科生徒が高校から介護を学ぶ道を志したのか、その進学動機とともに、介護や援助に対する意識を調査し、その特性を明らかにする。これらの結果は、今後の若者に対する介護福祉教育を考える上で不可欠な情報であり、介護福祉士養成校の充足率の低下に歯止めをかけ、役立つことも期待される。

## Ⅱ 方 法

### (1) 調査対象

調査対象は、神奈川県内の私立高校1校と、静岡県内の私立高校1校の、それぞれの高校福祉科に在籍する2～3学年の生徒136名（以下、福祉科群）とし、対照群として、神奈川県内の公立総合高校1校に在籍する2～3学年の生徒260名（以下、対照群）を設定した。

### (2) 調査方法

2008年12月～2009年2月に、各高校で質問紙調査を行った。神奈川県内の高校福祉科は筆者が実施回収し、静岡県内の高校福祉科は、あらかじめ確認した人数分の質問紙を郵送したうえで、実施回収は高校福祉科の教員に依頼した。対照群である総合高校では、筆者が質問紙を高校に持ち込み、担当の教員に実施回収を依頼した。質問紙は無記名とし、質問紙票の表紙には、学校の成績には無関係であること、分析は個人

表1 援助規範意識尺度の下位尺度別質問項目

尺度	質問項目
返済規範意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分に好意を示してくれたからといって、自分も好意を示してお返しをする必要はない*</li> <li>・人から何か贈られたら、同じだけお返しをすべきである</li> <li>・過去において私を助けてくれた人には、一生感謝の気持ちを持ち続けるべきである</li> <li>・恩人が困っているときには、自分に何があろうと助けるべきである</li> <li>・人にかけた迷惑は、いかなる犠牲（ぎせい）を払っても償（つぐな）うべきである</li> <li>・以前、自分を助けてくれた人には、特に親切にすべきである</li> <li>・人が、自分を助けるために何らかの被害にあっているなら、そのことに対して責任を持つべきである</li> <li>・受けた恩は、必ずしも返さなくてもよい*</li> <li>・相手がお返しを期待していないのなら、わざわざお返しをすべきではない*</li> </ul>
自己犠牲規範意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・救う能力が自分に備わっていない時には、救う努力をしても無駄である*</li> <li>・人が困っている時には、自分がどんな状況にあるうとも、助けるべきである</li> <li>・自分の利益よりも相手の利益を優先して、手助けするべきである</li> <li>・自分を犠牲にしても、人を助ける必要はない*</li> <li>・将来付き合うことのない人なら、困っていても助ける必要はない*</li> <li>・大勢の人が同じ状況で困っている時、まず、以前自分を助けてくれたことがある人を一番最初に助けるべきである*</li> <li>・自分が不利になるのなら、困っている人を助けなくとも良い*</li> <li>・社会の利益よりも、自分の利益を第一に考えるべきである*</li> </ul>
交換規範意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人を助ける場合、相手からの感謝や返礼を期待してもよい*</li> <li>・人の行為には甘えてもよい*</li> <li>・犯した罪を償（つぐな）わなくてもよい場合がある*</li> <li>・どんな場合でも人に迷惑をかけてはいけない</li> <li>・見返りを期待した援助など、全く価値がない</li> </ul>
弱者救済規範意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめられている人を、まず助けるべきだ</li> <li>・不当な立場で苦しんでいる人は、少しでも助けるべきだ</li> <li>・困っている人に、自分の持ち物を与えることは当然である</li> <li>・自分を頼りにしている人には、親切であるべきだ</li> <li>・社会的に弱い立場の人には、皆で親切にすべきである</li> <li>・自分よりも悪い境遇（きょうぐう）の人に、何か与えるのは当然のことである</li> <li>・人は自分を助けてくれた人を、傷つけるべきではない</li> </ul>

注 \*は逆転項目

を対象としておらず、個人が特定されることはないこと等を記述した。また、これらの内容を、筆者が実施したものについては、筆者自身が口頭で説明を行い、それ以外の場合は、担当の教員に口頭での説明をお願いした。なお、質問紙の回答は学校の授業時間内に教室で行われ、回答後は、クラスごとに封筒に入れて回収した。

質問紙の項目は、基本属性として、学年、性別、同居している家族構成（両親、きょうだい、祖父母）のほか、先に行った高校福祉科生徒へのインタビュー調査<sup>4)</sup>の結果を参考に、高校入学以前の介護福祉施設への訪問経験、介護福祉施設における介護実施経験、家族への介護実施経験、家族や親族内の医療・介護従事者の存在

表2 福祉科群と対照群の基本属性

(単位 人, ( ) 内 %)

	福祉科群 (n=132)	対照群 (n=247)	有意性
学年			
2学年	94(71.2)	186(75.3)	ns
3学年	38(28.8)	61(24.7)	
性別			
男子	33(25.0)	71(28.7)	ns
女子	99(75.0)	176(71.3)	
同居する祖父母の有無			
祖父いる	27(20.5)	24( 9.7)	p=0.00**
祖母いる	45(34.1)	42(17.0)	p=0.00**
介護福祉施設訪問経験の有無			
ある	93(70.5)	143(57.9)	p=0.02*
家族への介護経験			
ある	16(12.4)	22( 9.0)	ns
医療・介護従事者の有無			
いる	66(50.8)	56(23.4)	p=0.00**

注  $\chi^2$ 検定, \*p<0.05, \*\*p<0.01, ns : 有意差なし

の有無を尋ねた。さらに、介護のやりがいのついて「すごくある（4点）」から「ほとんどない（1点）」までの4件法で回答を求めた。また、既存の援助規範意識尺度<sup>5)</sup>を用いて、援助に対する意識を測定した。一部、高校生には理解が難しいと思われる表現を改変し、難しい漢字にはふりがなをふった。この援助規範意識尺度は、返済規範意識、自己犠牲規範意識、交換規範意識、弱者救済規範意識の4つの下位概念から成り立っており、質問項目29項目はすべて、「非常に賛成（5点）」から「非常に反対（1点）」の5件法で回答を求めた（表1）。

福祉科群と対照群の比較にあたっては、基本属性では $\chi^2$ 検定、介護のやりがいの得点と援助規範意識尺度得点の比較には、t検定とU検定を用い、有意水準を5%とした。データ解析にはPASW Statistics 17を使用した。

### Ⅲ 結 果

#### (1) 基本属性

本調査では、福祉科群では質問紙を136票配布し132票の有効回答（97.1%）を、対照群では260票配布し247票の有効回答（95.0%）を得た。

福祉科群と対照群の生徒の基本属性を表2に示す。学年と性別の分布には両群間に有意差は

表3 介護福祉施設における種類別介護経験の割合

(単位 人, ( ) 内 %)

	福祉科群 (n=93)	対照群 (n=143)	有意性
見学			
ある	49(52.7)	84(58.7)	ns
話し相手			
ある	74(79.6)	96(67.1)	p=0.04*
ゲームや体操			
ある	70(75.3)	69(48.3)	p=0.00**
食事や飲水の介助			
ある	15(16.1)	22(15.4)	ns
車イスを押す			
ある	40(43.0)	37(25.9)	p=0.01**
体ふきや入浴の介助			
ある	7( 7.5)	6( 4.2)	ns

注  $\chi^2$ 検定, \*p<0.05, \*\*p<0.01, ns : 有意差なし

みられなかった。同居する祖父母の有無を比較した結果、福祉科群では対照群に比べて、同居している祖父がいる（福祉科群20.5%；対照群9.7%）、祖母がいる（34.1%；17.0%）と答えた者の割合が有意に高かった（表2）。

高校入学以前の介護福祉施設の訪問経験は、経験ありと答えた者（70.5%；57.9%）の割合が福祉科群で有意に高かった（表2）。さらに、介護福祉施設の訪問経験がある者について、訪問先での経験を内容別にみると（表3）、「話し相手（79.6%；67.1%）」「ゲームや体操をする（75.3%；48.3%）」「車イスを押す（43.0%；25.9%）」の経験者の割合が福祉科群で有意に高かった。その他の「見学」「食事や飲水の介助」「体ふきや入浴の介助」の項目では有意差はみられなかった（表3）。

また、高校入学以前の家族や親族への介護経験の有無の項目では有意差はみられなかった。家族や親族の医療・介護従事者の有無の項目では、「いる」と答えた者の割合（50.8%；23.4%）が福祉科群で有意に高かった（表2）。

#### (2) 介護のやりがい

全体の比較では、介護のやりがいの平均得点は、福祉科群（3.62±0.60, n = 130）が対照群（3.26±0.76, n = 232）よりも有意に高かった（表4）。単純な属性別の両群間の比較では、

同居する祖父がいる者、同居する祖母がいる者、家族や親族内に医療・介護従事者がいる者では有意差がみられなかったが、ほぼすべての属性別の比較で同様の結果が得られた(表4)。

さらに、性、高校入学以前の介護福祉施設への訪問経験の有無、家族や親族の医療・介護従事者の有無の組み合わせで分けて群間比較を行った。その結果、施設訪問経験がなく、家族や親族に医療・介護従事者がいない男子と、施設訪問経験があり、家族や親族に医療・介護従事者がいない女子で、福祉科群の平均点が有意に高かった(表5)。

(3) 援助規範意識

両群間の全体の比較では、4つの下位尺度のうち、自己犠牲規範意識で福祉科群の平均点(3.53±0.49, n=122)が対照群(3.31±0.48, n=240)よりも有意に高く、弱者救済規範意識でも、福祉科群の平均点(3.58±0.42, n=127)が、対照群(3.45±0.47, n=239)よりも有意に高かった(表6)。

この結果を、さらに、性、高校入学以前の施設訪問経験の有無、家族や親族の医療・介護従事者の有無の組み合わせ別に検討したところ、男女で違いが認められた(表7)。

男子では、高校入学以前の施設訪問経験がな

表4 属性別の介護のやりがい平均得点

	福祉科群 平均値±標準偏差(n=130)	対照群 平均値±標準偏差(n=232)	有意性
全体	3.62±0.60(n=130)	3.26±0.76(n=232)	p=0.00**
学年			
2学年	3.57±0.65(n=92)	3.21±0.76(n=176)	p=0.00**
3学年	3.74±0.45(n=38)	3.41±0.76(n=56)	p=0.00**
性別			
男子	3.50±0.80(n=32)	3.00±0.89(n=66)	p=0.01**
女子	3.65±0.52(n=98)	3.36±0.68(n=166)	p=0.00**
祖父母の有無			
祖父いる	3.67±0.48(n=27)	3.43±0.73(n=23)	ns
祖父いない	3.60±0.63(n=103)	3.24±0.77(n=209)	p=0.00**
祖母いる	3.57±0.63(n=44)	3.41±0.67(n=41)	ns
祖母いない	3.64±0.59(n=86)	3.23±0.78(n=191)	p=0.00**
介護福祉施設訪問経験の有無			
ある	3.63±0.57(n=93)	3.39±0.61(n=135)	p=0.00**
ない	3.57±0.69(n=37)	3.08±0.91(n=97)	p=0.00**
家族への介護経験			
ある	3.81±0.40(n=16)	3.32±0.57(n=22)	p=0.00**
ない	3.58±0.63(n=111)	3.25±0.78(n=207)	p=0.00**
医療・介護従事者の有無			
いる	3.55±0.66(n=66)	3.27±0.92(n=56)	ns
いない	3.68±0.54(n=62)	3.27±0.69(n=171)	p=0.00**

注 t検定, \*p<0.05, \*\*p<0.01, ns:有意差なし, Mean(平均値)±SD(標準偏差)

表5 属性別組み合わせ別にみた介護のやりがい平均得点

施設訪問 経験	医療・介護 従事者	福祉科群 平均値±標準偏差(n=132)	対照群 平均値±標準偏差(n=247)	有意性
男子				
ある	いる	3.54±0.66(n=13)	3.50±0.84(n=6)	ns
	いない	3.29±0.76(n=7)	3.14±0.66(n=21)	ns
ない	いる	2.75±1.50(n=4)	2.71±1.38(n=7)	ns
	いない	4.00±0.00(n=8)	2.87±0.92(n=31)	p=0.00**
女子				
ある	いる	3.66±0.53(n=38)	3.43±0.68(n=30)	ns
	いない	3.70±0.53(n=33)	3.42±0.55(n=76)	p=0.01*
ない	いる	3.45±0.52(n=11)	3.08±1.12(n=13)	ns
	いない	3.64±0.50(n=14)	3.35±0.65(n=43)	ns

注 U検定, \*p<0.05, \*\*p<0.01, ns:有意差なし

表6 属性別援助規範意識尺度の群間比較

	福祉科群 平均値±標準偏差(n=132)	対照群 平均値±標準偏差(n=247)	有意性
全体			
返済規範	3.64±0.44(n=129)	3.57±0.44(n=237)	ns
自己犠牲	3.53±0.49(n=122)	3.31±0.48(n=240)	p=0.00**
交換規範	3.24±0.44(n=127)	3.15±0.51(n=237)	ns
弱者救済	3.58±0.42(n=127)	3.45±0.47(n=239)	p=0.01*

注 t検定, \*p<0.05, \*\*p<0.01, ns:有意差なし

く、家族や親族に医療・介護従事者がいる者で、返済規範意識が対照群で有意に高かった(表7)。

一方、女子では、高校入学以前の施設訪問経験があり、家族や親族に医療・介護従事者がいる者で、自己犠牲規範意識、交換規範意識において、福祉科群が有意に高かった。さらに、高

校入学以前の施設訪問経験がなく、家族や親族に医療・介護従事者がいる者では、自己犠牲規範意識が福祉科群で有意に高かった。また、高校入学以前の施設訪問経験がなく、家族や親族に医療・介護従事者がいない者では、自己犠牲規範意識と交換規範意識が福祉科群で有意に高かった（表7）。

#### Ⅳ 考 察

##### (1) 高校福祉科への進学動機

高校福祉科の生徒には同居する祖父や祖母がいる者の割合が有意に多く、日頃から高齢者やそれに近い年代の者とのかかわりがあると考えられた。このことから、祖父母が身近にいる環境が、高齢者への興味や理解につながり、それが介護への興味につながった可能性が示唆される。

また、高校福祉科の生徒では、高校入学以前の介護福祉施設への訪問経験がある者の割合が有意に多かった。さらに施設訪問経験者のなかで、要介護者の話し相手や、ゲームや体操を一緒に行うこと、車イスを押すといった経験をした者の割合も有意に多かった。このことから、介護福祉施設を訪問しただけでなく、施設に入所している要介護者と実際にかかわりを持つことによって、介護のよろこびや楽しさを実感したことが、高校福祉科への進学動機となった可能性が示唆される。なお、訪問先での食事や飲水の介助、体ふきや入浴の介助を行った者の割合では有意差がみられなかった。これは、食事や飲水の介助では危険を伴い、体ふきや入浴の介助ではプライバシーの問題があるため、両校

表7 属性別組み合わせ別にみた援助規範意識尺度の群間比較

施設訪問経験	医療・介護従事者	尺度	福祉科群		対照群		有意性
			平均値±標準偏差 (n=132)	平均値±標準偏差 (n=247)			
男子	ある	返済規範	3.80±0.47 (n=12)	3.41±0.36 (n=6)	ns		
		自己犠牲	3.59±0.44 (n=11)	3.40±0.52 (n=6)			
		交換規範	3.09±0.45 (n=11)	3.16±0.17 (n=5)			
		弱者救済	3.67±0.48 (n=12)	3.62±0.33 (n=6)			
	いない	返済規範	3.44±0.30 (n=5)	3.57±0.53 (n=24)	ns		
		自己犠牲	3.33±0.14 (n=5)	3.33±0.49 (n=23)			
		交換規範	2.88±0.23 (n=5)	3.25±0.64 (n=23)			
		弱者救済	3.74±0.55 (n=5)	3.43±0.46 (n=23)			
ない	ある	返済規範	3.14±0.25 (n=4)	3.70±0.27 (n=6)	p=0.02*		
	自己犠牲	2.97±0.58 (n=4)	3.31±0.40 (n=6)				
	交換規範	2.75±0.60 (n=4)	3.13±0.48 (n=6)				
	弱者救済	3.11±0.21 (n=4)	3.33±0.31 (n=6)				
いない	返済規範	3.81±0.61 (n=9)	3.54±0.59 (n=33)	ns			
	自己犠牲	3.63±0.56 (n=9)	3.14±0.66 (n=33)				
	交換規範	3.22±0.59 (n=9)	3.01±0.70 (n=30)				
	弱者救済	3.59±0.45 (n=9)	3.21±0.56 (n=33)				
女子	ある	返済規範	3.73±0.48 (n=38)	3.58±0.40 (n=28)	ns		
		自己犠牲	3.63±0.58 (n=34)	3.18±0.45 (n=29)			
		交換規範	3.35±0.42 (n=37)	3.07±0.51 (n=29)			
		弱者救済	3.66±0.50 (n=36)	3.41±0.46 (n=28)			
	いない	返済規範	3.55±0.32 (n=33)	3.62±0.40 (n=74)	ns		
		自己犠牲	3.46±0.40 (n=33)	3.48±0.39 (n=77)			
		交換規範	3.18±0.37 (n=33)	3.22±0.47 (n=77)			
		弱者救済	3.48±0.34 (n=33)	3.55±0.46 (n=77)			
	ない	ある	返済規範	3.61±0.50 (n=11)	3.56±0.53 (n=13)	ns	
		自己犠牲	3.55±0.54 (n=10)	3.06±0.47 (n=13)			
		交換規範	3.18±0.49 (n=11)	3.15±0.28 (n=13)			
		弱者救済	3.49±0.23 (n=11)	3.37±0.51 (n=13)			
いない	返済規範	3.56±0.35 (n=15)	3.54±0.36 (n=46)	ns			
	自己犠牲	3.58±0.34 (n=14)	3.31±0.40 (n=45)				
	交換規範	3.40±0.32 (n=15)	3.13±0.46 (n=46)				
	弱者救済	3.56±0.35 (n=15)	3.52±0.39 (n=46)				

注 U検定, \*p<0.05, \*\*p<0.01, ns:有意差なし

の生徒に容易に経験させられない内容であったためだと考えられる。

##### (2) 介護のやりがい

介護のやりがいの比較では、高校福祉科の生徒の平均点が有意に高かった。属性別に比較しても、ほぼすべての属性で同様の結果となった。しかし、同居の祖父や祖母がいる者の比較では有意差はみられなかった。このことから、このような環境におかれた者は、進学先とは無関係に、介護はやりがいのある仕事だと評価している可能性が考えられる。つまり、この属性がある者に、高校在学中に介護福祉施設への訪問や、その訪問先で要介護者と接する機会を意図的に設けることができれば、高校卒業後の進路に介護を選択する可能性を高められるかもしれない。介護のやりがいについて、どのような属性が

それを高めているのかを男女別に検証した。男子では、高校入学以前に介護福祉施設の訪問経験がなく、家族や親族に医療・介護従事者がいない者で、高校福祉科の平均点が有意に高かった。このことから、男子においては、介護のやりがいが高める要因として、高校入学以前の介護福祉施設訪問経験や、家族や親族に医療・介護従事者の存在がなかったとしても、高校福祉科の学校生活の影響により、介護のやりがいが高められた可能性が考えられる。

一方、女子では、高校入学以前に介護福祉施設の訪問経験があり、家族や親族に医療・介護従事者がいない者で、高校福祉科の平均点が有意に高かった。しかし、高校入学以前に介護福祉施設の訪問経験があり、家族や親族に医療・介護従事者がいる者では有意差はみられなかった。これらのことから、高校入学以前の介護福祉施設への訪問経験は、ある意味で、介護のよろこびを知るきっかけや、介護現場の肯定的な部分に触れる機会となるが、家族や親族に医療・介護従事者がいることにより、具体的な仕事内容や介護現場での苦労などの介護の否定的な部分を知る機会があり、介護の肯定的な部分が相殺されてしまうのかもしれない。しかし、進学先が高校福祉科であった場合、入学後のその学校生活の影響により、介護のやりがいが高まったとも考えられる。

このように、男子では、高校入学以前の介護福祉施設訪問経験がなく、家族や親族に医療・介護従事者の存在がなかった群で、女子では、高校入学以前の介護福祉施設訪問経験があり、家族や親族に医療・介護従事者の存在がなかった群で、それぞれ福祉科群の平均得点が有意に高い傾向にあった。これらのことから、介護への興味を促進させるような対策が男女で異なる可能性も示唆されるが、本調査では対象者が少ないため、今後、さらなる検討が必要になるだろう。

### (3) 援助規範意識

高校福祉科と総合高校の全体の比較では、自己犠牲規範意識と弱者救済規範意識が福祉科群

で有意に高く、この傾向は、ほぼすべての属性別にみても共通していた。これらの結果は、自己犠牲の精神や、弱い者を守るべきだといった意識が、入学前の様々な体験の有無やそのほかの属性にかかわらず、高校福祉科生徒に備わっていることを示唆している。

また、属性の組み合わせによる影響を、特に女子に着目してみると、高校入学以前に介護福祉施設の訪問経験があり、家族や親族に医療・介護従事者がいる者で、自己犠牲規範意識、交換規範意識において、福祉科群の平均点が有意に高かった。この条件を満たしている高校福祉科の女子は、人のために自らを犠牲にするといった意識を持ち、なおかつ、介護サービスを提供し賃金を得るといった交換的な意識が高いことがわかる。また、高校入学以前の介護福祉施設の訪問経験や、家族や親族における医療・介護従事者の有無によらず、自己犠牲規範意識が高いことから、女子には元々このような意識が備わっている可能性も示唆される。意識があるからといって、それが必ずしも行動につながるとは限らないが、介護福祉やその類縁の職業への適性は、男子よりも女子の方が高いと考えることもできる。

## V おわりに

本研究では、対象高校を無作為に抽出しているわけではなく、質問紙の実施回収方法も一定ではないため、比較可能性に限界もある。また、教員が質問紙の実施者となり、学校の授業時間内に質問紙の回答を行ったことから、結果の解釈には慎重さも必要である。しかし、本研究の成果として、環境を整えれば若者の介護に対する意識が高まる可能性が指摘できる。特に、高校入学以前の介護福祉施設への訪問経験は、意図的に与えることができるものであり、介護福祉への興味を持つ者を増やすことにつながる。つまり、若者にそのような場を提供することが、介護に対する興味を持たせる手段として有効だと思われる。また、高校での介護福祉士養成は、カリキュラム時間数の増加により事実上かなり

難しい状態になっている。実際に福祉科の名前だけを残し、介護福祉士受験資格は取得できない学校が増えつつある。しかし、若くして介護福祉への興味を持った若者の資格取得機会を減らすべきでなく、形を変えてでも高校からの介護福祉士養成は存続させるべきであろう。高校から介護福祉教育を受けることは、通常の教科時間数が短くなり、基礎的な学力が低下してしまうといったことや、高校における介護福祉士養成では十分な教育時間が確保できず、介護福祉士の質に影響するといった懸念がある。しかし、若者に対して、しっかりとした目標を提示して介護福祉教育が行えることは、一貫性のある教育につながる。また、介護福祉士資格が取得できることは、卒業後の彼らの自信になり、いざというときに介護の仕事ができるといった、安心感を与える可能性を秘めている。現在、新しい介護福祉の専門性を見いだそうとしている介護福祉士養成において、高校で行われる介護福祉教育が、今後どのような位置づけになるのか注目していきたい。

## 謝辞

本研究は、和光大学大学院における修士論文の一部として実施したものである。実施にあたってお世話になった方々に厚く御礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 厚生統計協会. 国民の福祉の動向 2008 ; 55(12) : 189-91.
- 2) 厚生労働省ホームページ. 介護労働者の確保・定着等に関する研究会中間取りまとめ (<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/07/dl/h0729-2b.pdf>) 2008.12.11.
- 3) 厚生労働省ホームページ. 介護福祉士養成施設の定員充足率の推移 ([http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0329-7c\\_0009.pdf](http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0329-7c_0009.pdf)) 2010.12.17.
- 4) 佐藤大輔. 高等学校福祉科生徒の意識調査－入学動機の聞き取り調査報告－. 和光大学学生研究助成金論文集 2006 ; 14 : 33-62.
- 5) 箱井英寿, 高木修. 援助規範意識の性別, 年代, および世代間の比較. 社会心理学研究 1987 ; 3 (1) : 39-47.